

響

流

第 62 号 2010 年 1 月 1 日 発行



頌 春

本年も何卒よろしく
お願い申し上げます。

真宗大谷派 玩月山 西光寺

住 職	藤石 哲朗
坊 守	藤石 ひろ子
責任役員	森瀬 良定
総 代	福田 忠
	奥田 光子
	関谷 清吉
	三木 昇
	越智 徹
門徒会員	伊與田 幸子

修正会 しゆしんかい のご案内

お正月は、いつの世でもおめでたいものです。しかし、こんなだれもが気持ちをし新しくしている時でも、世界を見渡しますと、あちらこちらで不幸な出来事が引き起こされ、悲しみの中に沈み込んでいる人びとがたくさんおられます。そのことを知りつつ、私たちは、何をなすべきか、複雑な相を知れば知るほど、何一つ果たし遂げることができないという無力な現実があります。

すべての争い、戦いの元は、人間、洋の東西を問わず、「煩惱の凡夫」であることから始まっていると、人間の実相を見つめられて教えて下さったのがお釈迦様です。

ところで、普段私たちが思っている信仰とか信心といわれることは、人間の実相を深く見つめることなく、自分にとって都合のよくなることを願うこと、そして適えられるようにと日頃しないことを行うことの総体として理解されているのではないのでしょうか。

しかし、どこまでも自分の都合を頼むことを善しとしている自分に気づくことなく、それが御利益と受け取っています。「神で仏でも、とにかくどっちでもいいけど、俺の思うとおりにしてくれ！」というのがお参りの心となっていないでしょうか。

神仏の利益で物欲や名誉欲を満たしていくことが信心ではありません。

親鸞聖人が「和国の教主」（日本のお釈迦様）と尊敬なさった聖徳太子は「世間虚仮、唯仏是真」

（世間虚仮、ただ、仏のみまことにておわします）（天寿国續帳）

といわれ、親鸞聖人は「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもつて、そらごと・たわごと・まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」と『歎異抄』に、その教えを常のおおせとして聞かれた唯円坊が伝えて下さいました。

（煩惱にまみれた凡夫である私たちの暮らすこの世は、まるで燃え落ちる家のようににはかなく激しく移ろいやすい世界であり、すべては空虚な、嘘偽りにみちた、評価の定まらないむなし世界である。真実はどこにも見あたらぬ。その中でただ南無阿弥陀仏という念仏だけが、はつきりとした真実として存在し、人びとの心を支えることができるものなのだ）

いくら修行をしても、煩惱熾盛のこの身、おさえでもおさえでも湧き上がってくる燎原の炎のような煩惱、人間の努力や心掛けくらいではとても救われることのない身であると、苦悩の中から深く自覚し、「どのようなものでも、必ずすくいとり」という阿弥陀如来の本願にふれ、私のような愚かな者をこそ救う

と願を起こされたのだと、阿弥陀の誓願に出遇ったのでした。

煩惱そのもの、煩惱丸抱えのままのこの身、このまま、この自覚に立って、念仏によって、いつでも自分の都合を最優先して生きようとする私自身の在り様を見つめ、常に教えに照らされて、人生の軌道を修正してまいりたいものです。

今年も修正会をお勤めいたします。年の初めを共にご本尊・阿弥陀さまの前で、私の在りようの軌道修正をし、こころおだやかな“いのち”を歩んでまいりたいと思います。

修正会

一月一日 午前十一時から正午まで

会場 西光寺 本堂

「正信偈」をご一緒におつとめをし、住職の話のあと、簡単なおせちをいただきます。



御修復をへて創建時の輝きとなった本山・御影堂（ごえいどう）

撮影 住職

報恩講をおつとめしました

前号（初めてのフルカラー版で、週刊誌一冊並の印刷代となつてしまいました！）でのお知らせの通り、例年おつとめされてきた西光寺として四〇一回目の報恩講をおつとめさせていただきました。

久々に冷え込んだ日でしたが、三〇余名の方々がお参り下さいました。また、どうしてもお参りできないという多くの方より「報恩講御仏具米志」をお供えいただきました。ありがとうございます。

北海道からお出でいただいた金倉泰賢先生のほんわかとユルい、なんともいえぬ北海道の大地を感じるようなお話しが多くの方の胸に染みていったことです。楽しい譬え話しや、身につまされる身近



なことから教えを聞くということを丁寧に丁寧におさとしたことができました。

次号で紹介させていただきませんが、文字にするとホンワカとしたニュアンスが伝わりづらいのが残念です。

また、私の尊敬する年長の法友である、白川良行さんが住職をなさっている源隆寺のご門徒、吉井さんのご主人とお嬢様による手品をご披露いただきました。マジック・ショーはとても華麗で艶やかで、素晴らしいものでした。門徒さんもステージ？に上がり、トランプや切ったはずのロープが繋がるという場面での表情に会場が笑いの渦に巻き込まれ、本堂全体があたたかい空気に包まれました。



吉井利臣さんとお嬢様の吉井明子さん



さあ ショーの開幕です！光と海が幕をあけます

金 倉



泰賢先生の法話抄録

◇ 「報恩講」とは恩に報いる集いということですが、親鸞聖人の言われる恩と私たちが思うところの恩はどうやら違うようです。私たちは恩といいますが、自分がうまい目にあったり、有り難い目にあったときに恩を感ずるといふことがあるのですが、そんなお調子の良いご恩ではないんですね。

◇ 日本人の三分の二の方が初詣に行かれるそうですね。一人の人が何カ所もお詣りするということがあるかもしれません。そうしたら、「あの人はあつちも行くこつちも行く。いろんなところに行って信心深いね」という方がおりますね、そういう人を昔からなんて言ってたかというかね、「信心しすぎて極楽を通り越す」というんです（笑い）。あんまりあつちもこつちもとお詣りしておいたら、どこへ行くやらわからないのですよ。

西光寺さんでもお正月は修正会が勤まります。目隠しをして100歩歩きますと25歩くらい右か左かにズレるそうです。循環方向といっただうしてもズレてしまうのですね。ある意味では私たちはいろんなことを一生懸命頑張るんだけど、で

もズレてしまうのですよ。ですからそのズレてしまうものを、もう一遍軌道修正していく、そういう意味で修正会ということがあるのですが、なかなかそこにはお見えにならないんです。

そういう意味では正月三日はね、北海道は雪が舞いますが、



日本全国何が舞っているかとゆうたら、請求書が舞ってるんですね。「ああなつてほしい、こうなつてほしい」というものですね。でも私たちに縁の深いお念仏の教えは何かといったら、これは米沢英雄（福井・医学博士）という先生がおっしゃったのですが領収書です。

今あるこの身をいただいて行く、そのことを「ありがとうございませした」と、頷いていける眼を私にいただくんだと、だから実は領収書ということが大事ですとおっしゃいました。

◇ 自分のことはわからんのですよ。何が出てくるかわからん、

それこそ「さるべき業縁のも

よおせば」【歎異抄】どんな立派なことをするかもしれないし、また、どんな悪いことをしてしまいかもしれません。私たちはそういう存在でありながら、それをわかったことにしているんですよ。



でも人の事はよくわかるですね。「あいつは腹黒い」とか「根性が曲がってる」とかね、人のことはようわかるのです。それは自分を棚に上げてる証拠です。ある先生に「それは、部屋の中から夜景見るのといっしょだ」といわれました。高層ビルのレストラン、あまり行く機会はありませんが、明るい照明ではないですね、薄暗いのはありませんか。暗いと外の景色がよく見えるんです。中が明るいと外がよく見えな。ということ、人のことがよく見えているというときは、たいてい心の中が暗い時ではないですか。だから人を羨ましがったり、あいつはいいなと言ってるときは、自分の心は暗

いんではないですかね。

◇ 私たちは満ち足りないということがありますが、それは何かと
いったらやっぱり暗がりの心ですね、我が儘な心でいろんな
モノを追い求めている。仏さまの教えに遇うということは光
として表現されます。光は明るさです、闇を破るのが光のは
たらきですよ。私たちは心の中暗いです、そのことに気づけ
よと、心の中の暗さをもういっぺん光を当てることによって、
明るくなっていく、そのことによって大事なことをいただい
ていくことができるんです。

◇ お寺に來ない人はお寺のことわかったつもりになってますね。
だから「お寺に來てください」と言ったらどういふ答えが來る
かというのと、「俺にはまだ早い」。顔見たらそんなに早いと思
わんのですけど（笑い）俺にはまだ早いと、こうおっしゃるん
です。なにかといったらお寺は生きている間は用事がないとこ
ろだと思っているんですよ。死んでからだということでしょう
ねえ。でもね、死んでからじゃ間に合わんですね。

これもおかしい話かもしれませんがお寺のことを寺院とい
いますでしょう、院がつくところでは他に病院というところが
ありますよ、病院というのはどういふところかというところ病氣の
人が行くところですね。お寺もね、病氣の人が來るところなん
ですよ。どういふ病氣かといったら、生まれたら必ず死にます

よという病氣なんです。これは残念ですけども、今までの間に
生きっぱなしという人
は一人もい
ないですか
らね。

残念なが
らやっぱり
いのちが生
まれたら終
わっていく
んです。そ
ういふ病氣
を抱えてい
るのですよ。
だからその
事は死んで
からじゃ間
に合わん
ですよ。



金倉先生のお話に引き込まれ爆笑 爆笑

2010年 西光寺行事日程

- 1月1日（金）修正会 午前11時～正午 年始のおつとめと法話
引き続き心ばかりのおせちを用意しています。
- 1月24日（日）～28日（木）東京教区御遠忌お待ち受け大会兼真宗会館設立
20周年法要
- 2月17日（水）「親鸞聖人に人生を学ぶ講座」第5回 午後6時半～9時
会場 長泉寺
- 2月20日（土）西光寺聞法会（正信偈のお勤め、輪読と語り合い）3時～5時
- 3月18日（木）～24日（水）春季彼岸会
※3月21日（春分の日）彼岸会合同法要 午前11時から 法話 住職
- 4月21日（水）「親鸞聖人に人生を学ぶ講座」第6回 午後6時半～9時
- 5月16日（第3日曜日） 西光寺 永代経 午前11時から
法話 本多雅人先生 お齋のご用意があります

ご法事は亡き人のことをもう一度思い出す大切な儀式です。それは失ってきた過去にふれるまたとない機会でもあります。

亡き人の名を想いおこすことで、自分を生み出してくれた歴史に出会う場でもあります。

亡き方からのメッセージを大事にご縁と受けとめ、ぜひおつとめいたしましょう。

前もってお寺からお知らせをいたしますが、お心づもりの程宜しくお願いいたします。

日程は、お寺の行事等と重なる場合もありますので、お早めのご連絡をお願いいたします。

五十回忌	三十七回忌	三十三回忌	二十七回忌	二十三回忌	十七回忌	十三回忌	七回忌	三回忌	一周忌
昭和36年	昭和49年	昭和53年	昭和59年	昭和63年	平成6年	平成10年	平成16年	平成20年	平成21年

響流 第62号
発行者 真宗大谷派 西光寺
住職 藤石哲朗
(法名 釋徹舟)

110-0015
東京都台東区東上野6-15-6
tel. 03-3841-3229
fax. 03-5828-4495

平成二十一年度
年回表